上代・中古和文資料における，ノチ節のテンスとアスペクト

橋本　修

0．はじめに

現代日本語において，形式名詞「あと」に導かれる節の述部は，特定の例外を除いて，（1）のような助動詞「た」のついた，いわゆるタ形になるのが普通である（注1）。

（1）　客が　帰った／＊帰る　あと，内輪のパーティをする。

一方，古典語において，形式名詞「のち」に導かれる節（以下ではノチ節と略記）の述部におけるテンス・アスペクト形式の分布は，かなり複雑である。ノチ節他，古典語従属節のテンス・アスペクトについての先駆的研究である井島1990の調査（主として上代・中古の和文系資料を対象とする）では，ノチ節のテンス・アスペクト形式として，以下の13通りが挙げられている。

～ϕ（ゼロ）	～シ
～ヌル	～ニシ
～タル	～テシ
～ム	～リシ
～ナム	～ケル
～テム	～ニケル
	～テケル

このような分布の実態は混沌としているように見えるが，その中には，なんらかの規則性があるのだろうか。本稿は，井島1990をはじめとする先行研究の成果をふまえ，本稿が追加する調査結果と合わせ考えて，その分布にはある規

則性（傾向性）があることを主張し，あわせてその規則性が意味するものを考える。

1．分布の規則性の骨子

本稿の主張する，ノチ節のテンス・アスペクト形式の分布に関する規則性の骨子は以下のようなものである。

（2）

① ノチ節が状態述語（形容詞・形容動詞・状態動詞）をとる場合，完了形(完了の助動詞ツ・ヌ・タリ・リのついた形)は出現しない。

② ノチ節が非状態述語をとる場合，

a 非過去形（キ，ケリのつかない形）の場合，完了形の出現が義務的である。

b 過去形（キ，ケリのついた形）の場合，完了形の出現は義務的でない。

詳細は2.以下の論証の際に見るが，上の規則性は具体的には，概略次のようなことである。ノチ節は述部に，テンス形式として，ϕ（ゼロ），キ，ケリ，ム（ムは純粋なテンス形式とは言えないが，「非過去形」であるという意味で，含めて取り扱う必要がある），の4つをとり，アスペクト形式として，ϕ，ヌ，ツ，リ，タリ，の5つをとる。ひとつの予測としては，ノチ節は常に主節に対する相対的な時間関係をあらわすのだから，アスペクト形式として，義務的に完了形（完了の助動詞のついた形）が出現する（一方テンス形式は，発話時を基準にして独立に決定される）のではないかということが考えられる。

この予測は，しかし，部分的にしかあたらない。上の規則は，その事情を体系的に示している。即ち，述部が形容詞・形容動詞や状態的な動詞といった状態述語である場合，次のように完了形（完了の助動詞）は出現しない。

（3） 親にて，[なき] のちに聞き給へりとも，(源氏物語，蜻蛉，10.p90,16)（注2）

（4） さらなり。かたかるべき事にもあらぬを，[さもあらむ]のちには，

えほめ奉らざらむが，くちおしきなり。(枕草子，p147,1)

ノチ節の述部が非状態的な述語（非状態述語）の場合は，過去形か否かで，完了形の義務性が異なる。非過去形の場合，ノチ節の述語動詞は義務的に完了形になる。即ち，「死ぬ」「往ぬ」のような，「つ」「ぬ」のついた形とつかない形との対立が不完全な動詞を述語とする場合や，ノチ節として異質なもの以外は，ほとんどすべて完了の助動詞がつく。

（5）　[中将の立ち給ひぬる]のちに，若君の御乳母の宰相の君して（源氏物語，葵，2.p116,12)
（6）　見る人もなき山里の桜花［ほかの散りなむ]のちぞ咲かまし（古今和歌集，68)

一方，ノチ節の非状態述語が過去形の場合は，

（7）　[おほせられし]のちなむ，隣のこと知りて侍る者，呼びて問はせ侍りしかど（源氏物語，夕顔，1.p110,12)
（8）　かの院にはいみじう隠し給ひけるを，おのづから人の口さがなくて［伝へきこしめしける]のち，いと悲しういみじくて（源氏物語，夕顔，7.p86,17)

のように，完了の助動詞がつかないものも現われ，完了形は義務的でない。

2．以下でこれらの現象の詳細を見，また，これらの現象が文法上どう解釈できるかについて検討する。

2．資料調査

2－1　調査の概略

1.で挙げたことがらを検証するために，以下のような資料調査を行なう。調査の形は，井島1990に準じた形で行なうが，検証の対象の性格上，調査・検討の網の目は，より細かくなる。調査の対象は，以下に挙げる各文献である。最終的には当然当該時代の全ての文献にあたる必要があるが，現実的に難しいので，井島1990に準じた文献の選択になっている。また校異については，すべて

を挙げることは不可能なので,特に問題となる箇所について検討するに止める。

調査対象文献（括弧内に使用本文と，使用した索引類を示す。索引のみを提示してあるものは，索引内の本文編を使用本文としているものである）

古事記歌謡（岩波日本古典文学大系）
日本書紀歌謡（岩波日本古典文学大系）
仏足石歌（岩波日本古典文学大系）
万葉集（小学館日本古典文学全集，正宗敦夫編1974『万葉集総索引　単語篇』平凡社）
竹取物語(上坂信男編1980『九本対照竹取翁物語語彙総索引　本文編　索引編』,
古今和歌集（小学館日本古典文学全集，片桐洋一監修1986『八代集総索引』大学堂書店）
伊勢物語（岩波日本古典文学大系，大野晋他編1972『伊勢物語総索引』）
土左日記（小久保崇明1975『土佐日記本文及び語彙索引』笠間書院）
後撰和歌集（新編国歌大観，片桐洋一監修1986『八代集総索引』大学堂書店）
平中物語（曽田文雄1985『「平中物語」研究と索引』渓水社）
落窪物語（岩波日本古典文学大系，松尾聡他編1967『落窪物語総索引』明治書院）
蜻蛉日記（岩波日本古典文学大系，佐伯梅友他編1981『かげろふ日記総索引』風間書房）
宇津保物語（宇津保物語研究会1973，1975『宇津保物語本文と索引』笠間書院）
大和物語（岩波日本古典文学大系，塚原鉄雄他1970『大和物語語彙索引』笠間書院）
枕草子（松村博司監修1967『枕草子総索引』右文書院）
拾遺和歌集（新編国歌大観，片桐洋一監修1986『八代集総索引』大学堂書店）
源氏物語（角川文庫，池田亀鑑1953『源氏物語大成　第4巻　索引編』中央公論社）
紫式部日記（佐伯梅友監修1956『紫式部日記用語索引』厳南堂）
栄花物語（高知大学人文学部国語史研究会編1986『栄花物語　本文編　自立語索引編』武蔵野書院）
和泉式部日記（東節夫他編1959『和泉式部日記総索引』武蔵野書院）
堤中納言物語（岩波日本古典文学大系，築島裕他編1982『堤中納言物語総索引』

勉誠社）
浜松中納言物語（池田利夫1973『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院）
夜の寝覚（岩波日本古典文学大系，阪倉篤義他編1974『夜の寝覚総索引』明治書院）
更級日記（岩波日本古典文学大系，東節夫他編1956『更級日記総索引』武蔵野書院）
狭衣物語（岩波日本古典文学大系，塚原鉄雄他編1975『狭衣物語語彙索引　内閣文庫蔵本』笠間書院）

これらの資料の中から，形式名詞ノチを含む節をすべてぬきだし，以下のような処理を行なう。

（1）　当該の節のうち，連体詞，連体助詞「の」，格助詞「より」，接続助詞「て」「で」，などに直接ノチが後接するものを除外する。即ち，対象を，テンス・アスペクトの分化を持つ述語文節にノチが直接後接するものに限定する。

（2）　（1）で集められた全用例について，それぞれノチを修飾する述語文節（正確には，その述語文節からアスペクト・テンスの助動詞を除いた部分）のタイプがどのようなものであるかを調べ，分類しておく。分類基準は，主として述語の状態性の有無である。具体的には，形容詞・形容動詞・状態動詞を状態述語とし，状態動詞以外の動詞を非状態述語とする。動詞の状態性に関しては，

ア　主動詞「あり」「をり」「侍り」（形容詞連用形につくものは主動詞として扱う）

イ　「あり」「をり」他の敬語形「おはす」「おはします」など，

ウ　「～て侍り」など，テ形に後接するア・イ（注3）

は状態動詞とし，その他の動詞すべてと，動詞連用形に後接する「侍り」（正確には動詞連用形＋「侍り」全体）は非状態性とする。動詞にテンス・アスペクト以外の助動詞や敬語補助動詞がついた形については，上述の場合を除き，基本的には動詞の状態性に関する特徴をそのまま受け継ぐものとして扱う（否定の「ず」などは，非状態動詞を状態述語に変えている可能性もあるが，本稿の調査範囲では問題になる例がなかった）。

（3）　（2）で分類された全用例について，節内の，ノチを修飾する述語のアスペクト・テンス系助動詞の分布がどのようになっているかにつ

いて調べる。即ち，当該のノチ節において，どのようなタイプの述語に，どのようなテンス・アスペクト形式が分布しているのかを網羅する。アスペクト・テンスの助動詞としては，「つ」「ぬ」「り」「たり」「き」「けり」「む」を対象にする。また，助動詞のつかない「ϕ」（ゼロ形）の用例も対象とする。

調査の結果については，概略は表の形で示すが，特に問題となる点については，検討の際に当然全用例を挙げて検討することになる。また，用例数には一定の存疑例を含むが，用例数の提示自体が目的ではなく（助動詞の組合せのグループの存否が最も重要である），また存疑例全てについて検討する余裕がないので，グループそのものの存在が疑われないかぎりにおいては，詳細については触れない。ただし，以下具体的に挙げた例文は，特に断りのないかぎり，校異，解釈等に問題が少ないと筆者が考える例を挙げてある。

2－2 調査結果

調査結果の概略は，以下の表1～2にまとめられる。非状態述語に関する表2は，スペースの都合と，中心的な検討対象が規則性（2）にあることから，非過去形（キ，ケリのつかない形）場合の表2aと，過去形の場合の表2bとに分けてある。表の形式は概ね井島1990に準じている。例えば，表1の一段目，「蜻蛉日記」の段は，ノチ節が状態述語をとる場合，「ϕ（ゼロ）＋ム」即ち「～ム」の形が1例あり，その他の形がないことをあらわしている。なお，文献名のうち，2－1の調査対象文献に挙がっているもので，ここでの表1～2に挙げられていないものは，その文献に，該当する例がなかったものである。また，表1，2における各欄の総数が，井島1990の各欄の数と一致しない部分があるが，その理由（何をカウントし，何をカウントしていないかなど）が不明であり，また，例数の違いが論の決定的な違いに結びつく箇所がなかったので，特に問題にはしない。

表1　状態述語

リタヌツリ	φ	リタヌツリ	φ	リタヌツリ	φ	リタヌツリ	φ	アスペクト形式
ケリ	ケリ	キ	キ	ム	ム	φ	φ	テンス形式
					1			蜻蛉日記
							1	宇津保物語
					1			枕草子
	1		2		9		1	源氏物語
					2			栄花物語
					1			浜松中納言物語
			1		1			夜の寝覚
			2		1			狭衣物語

表2　非状態述語

表2a　非過去形

リ	タリ	ヌ	ツ	φ	リ	タリ	ヌ	ツ	φ	アスペクト形式
ム	ム	ム	ム	ム	φ	φ	φ	φ	φ	テンス形式
			1							古事記歌謡
		2								万葉集
		4		1						古今和歌集
							1			落窪物語
							1			蜻蛉日記
		2					1			宇津保物語
						1	6	1	4	枕草子
				1						拾遺和歌集
		11								源氏物語
				1		1				栄花物語
							1			和泉式部日記
		3								浜松中納言物語
							1			夜の寝覚
							1			更級日記
		5	1							狭衣物語

表2b 過去形

リ	タリ	ヌ	ツ	φ	リ	タリ	ヌ	ツ	φ	アスペクト形式
ケリ	ケリ	ケリ	ケリ	ケリ	キ	キ	キ	キ	キ	テンス形式
							2	1	1	落窪物語
							2			宇津保物語
		1								大和物語
			1							枕草子
		1		1	1		13	3	8	源氏物語
							2			紫式部日記
					1		8	1		栄花物語
			1				5			浜松中納言物語
						1	7	3	2	夜の寝覚
							1			更級日記
					1		1	1	1	狭衣物語

3．調査結果の検討

3－1 アスペクト系助動詞のタイプ

助動詞「つ」「ぬ」「り」「たり」の分布について注意されるのは，「つ」「ぬ」が多く現われ，「り」「たり」が，わずかしか現われないという点である。表1～2の範囲では，「～タル」の形が『枕草子』『栄花物語』に1例，「～リシ」の形が『源氏物語』『栄花物語』『狭衣物語』に1例，「～タリシ」の形が『夜の寝覚』に1例あるのみである。以下にその用例を挙げる。

(9) ［子生みたる］のちのことの，久しき。(枕草子，p171,11)

(10) ［上達部二人たちてむかひあひて，さるべき人々すこしばかりを具してまいりゐたる］のちに，蔵人俊経ふたあゐのうつくしきとりてひろげしくをみれば，(栄花物語，32巻18丁15)

(11) これは，［源氏の御ぞうにも離れ給へりし］のちの大殿わたりにありけるわるごたちの落ちとまり残れるが，(源氏物語，竹河，8。p52,1)

(12) ［大宮の東宮のむまれさせ給へりし］のちの行幸ただそのままのあ

りさまなり。（栄花物語，11巻８丁６）

(13)　源氏の宮は，［古き跡尋ね給へりし］のちは，いみじう疎みたる御気色を，「さればよ」と心憂きに，（狭衣物語，p75,16）

(14)　［宮は，たえいり給たりし］のち，いとおもくなり給て，（夜の寝覚，p291,１）

このうち，用例（11）は，ここでの対象とすべきでない疑いが，かなり濃厚な例である。すなわち，［源氏の御ぞうにも離れ給へりし］の部分は，単独の「のち」を修飾するという読みよりも，「のちの大殿（わたり）」全体を修飾しているという読みの方が，より自然であるように思われる。

また，用例（９）は，［子生みたる］が「のち」を修飾しているのか，「のちのこと」全体を修飾しているのか判別しがたい。またこの例には本文に問題があり，三巻本は「うみたるのちのこと」であるが，伝能因本は「うみたる人ののちのこと」，堺本は「うみたるにのちのもの」であり，本稿の検討対象外となる。

用例（10）については，「のち」が時間の前後関係ではなく，空間上の位置関係を表わしているという解釈の可能性もある。ただし，望月1987の述べるように，上代・中古資料において空間上の位置関係をあらわす「のち」の例が非常に少ないのも事実であり，どちらの解釈がよいか微妙である。

その他の用例には，特に本文等，積極的に存在を疑わせるような要素は見当らない。

結論的には，いくつかの用例の存在は否定できないが，ノチ節内述語の完了系助動詞としては，「つ」「ぬ」が圧倒的優勢で，「り」「たり」はあってもわずかであるという傾向は否めない。この現象の解釈としては，「「り」「たり」が状態性の助動詞であり，ノチ節は状態性の述部と共起しにくい」というものが，まずは穏当であると思われる。ただし，ノチ節内に形容詞述語や，状態動詞が現われる場合もあるので，より正確な言い方としては，「ノチ節は状態性の述部と共起しにくいため，完了系助動詞が現われる場合，非状態性の助動詞「つ」「ぬ」が出現できない理由が特にないので，状態性の完了系助動詞「り」「たり」が現われにくいのだ」という程度の説明がよいのかもしれない（また「り」「たり」が状態性であるという言い方は，鈴木泰1992などの研究で明らかなように粗すぎるが，当面の課題にとっては影響が少ないので，この言い方で統一する）。現代語の「あと」を含む節（以下「（現代語）アト節」と呼ぶ）におい

ては，通常，「ている」を含んだ状態性の述部「ていた」は現われないが，例外的に，「ている」を含まない単純タ形が不自然な場合には，許容度が高くなることがある。

(15) ご飯を 食べた／＊食べていた あと（に，で），出掛ける。
(16) ずっとじっと ＊した／（？）していた あと（に，で），立ち上がったので目まいがした。

(16) の「ていた」形は，(15) の「ていた」形よりもかなり許容度が高い。このように現代語アト節の状態性述語についての制約にも若干の例外があるので，上代・中古語のノチ節に関しても状態性述語の制約に例外があることも，必ずしも驚くに当たらない。また，3－2で触れるように，上代・中古語ノチ節には，状態性述語に関する，現代語アト節にはないタイプの例外もある。

3－2 状態述語の存在

注目される第2点は，表1のように，現代語アト節であれば中に現われ得ない，形容詞・形容動詞や「あり」「侍り」などの，状態述語が出現しているという点である（形容動詞の例は全部で1例のみ）。形容詞・形容動詞述語の例と「あり」「おはします」（「おはします」の例は全部で1例のみ）の例を，それぞれ挙げておく。

(17) 紫の上にも，きし方ゆく先のこと思し出でつつ，かうやうの例を聞くにつけても［なからむ］のち，うしろめたう思ひ聞こゆるさまを宣へば，（源氏物語，夕霧，7.p131，1）
(18) ［此人のたいらかならん］のちは，ともかくも，我心ながらおぼえむ，（浜松中納言物語，p421，3）
(19) さらなり。かたかるべき事にもあらぬを，［さもあらむ］のちには，えほめ奉らざらむが，くちおしきなり。（枕草子130段，p147，1）
(20) ［おはしまさざらん］のちも，「女房などのそこの人とてあやしきさまにてちりうする，いと心うき事なり。～」と仰せられ（栄花物語，39巻10丁2）

ここに挙げた例はいずれも「む」の後接した例であるが，（3）のように，「む」

のつかない形もある。

このような例は標準的な現代語訳では「いなくなった（死んだ）あと」「治ったあと」「そうなったあと」などとなるところである。また，本稿の中心的な調査の対象外であるが，否定的な意味を含む接続助詞「で」を含む場合にも以下のような同様の例がある。

(21)　いかにぞ，[おはしまさで] のち，こころぼそからぬ，など問ひ給ふ。(源氏物語，椎本，8.p163, 9)

以上，上代・中古ノチ節の方が状態述語をとる幅が広いということになる。これら状態述語には完了の助動詞が現われないが，この点については3－31(解釈については3－34) で述べる。

3－3　規則性（2）の検討

ここで，本稿の主要な論点である，規則性（2）の検討を行なう。以下，論点を分けて，順次，検討する。

3－31　状態述語（形容詞・形容動詞・状態動詞）の場合

表1において，ノチ節内の述語が状態述語の場合，完了の助動詞は「つ」「ぬ」「たり」「り」のいずれも出現していない。もともと状態述語に完了の助動詞がつく頻度は低く，また用例数がそれほど多く見いだされていない現在の状態では，状態述語のノチ節に完了助動詞が出現し得ないという規則性が絶対的なものであるとは言いがたいが，少なくとも，「非状態述語の非過去形の場合と異なり，完了の助動詞の出現が義務的ではない」ということは明確であるし，完了の助動詞が現われにくいという傾向性も，まずは認めてよいと思われる。

非状態述語の非過去形の場合，完了の助動詞の出現は，ほぼ義務的である。ところが，状態動詞の場合，既にみたように非過去形であっても，すべて完了の助動詞は現われておらず，非状態述語の非過去形の場合において理由のはっきりしない例外がほとんどないことを考えれば，非状態述語の場合と様相が大きく異なることは，確実である。

3－32 非状態述語の非過去形の場合

ノチ節の述語が非状態動詞の場合，過去形と非過去形では，様相が異なる。ここではまず，非過去形，即ち，「き」「けり」のつかない場合（即ち，（2）の②a の場合）について見る。

非過去形には，助動詞「む」のつくものと，テンス系助動詞に関してはゼロ形のものとがあるが，いずれの場合にも，完了の助動詞の出現がほぼ義務的である。以下に用例を挙げる。

(22) ほととぎす ここに近くを 来鳴きてよ [過ぎなむ] のちに（須疑奈無能知爾） しるしあらめやも （万葉集4438）

(23) つひの世のおもしとなるべき心おきてをならひなば，[侍らずなりなむ]のちも，うしろやすかるべきによりなむ，（源氏物語，乙女，4．p73，8）

(24) さすがに，[わが見捨ててむ] のちをさへなむ，思ひやりうしろみたりし。（源氏物語，帚木，1.p66，9）

(25) [事の乱れ出で来ぬる] のち，我も人も憎げにあきたしや。（源氏物語，夕霧，7.p140,15）

(26) 人のもとにこれよりやるも，人の返りごとも，[書きてやりつる] のち，文字一つ二つ思ひなほしたる。（枕草子，p103，7）

非過去形において，調査範囲で助動詞「つ」が出現するものは少なく（表2 a において計3例），あとはほとんど「ぬ」（他に「たり」が2例）である。このことに文法上積極的な意味があるかどうかはよく分からない。また，後述するが，用例（24）の「見捨ててむ」は，異本では「見捨てむ」となっている。

この現象に対する一応の例外となる例，「ゼロ＋ゼロ」，「ゼロ＋ム」の例は，表2 a の範囲では，以下の7例である。例を全て挙げる。

(27) [かれはてむ] のちをば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな（古今和歌集686 ）

(28) [恋ひ死なむ] のちはなにせん生ける日のためこそ人の見まくほりすれ（拾遺和歌集685）

(29) [「若き人おはしけり」とてひきたてて往ぬる] のちに，笑ふこといみじう，（枕草子，p8,16）

(30)　［雪の山に登り，かかづらひありきて往ぬる］のちに，右近の内侍に，かくなど言ひやりたれば，（枕草子，p89，4）

(31)　［「～参らむ」と言ひて往ぬる］のち，御返言書きて参らせむとするに，この歌の本さらに忘れたり。（枕草子，p159，7）

(32)　ささめき取らせて，［往ぬる］のちも久しうながめて（枕草子，p196，15）

(33)　［まろが死なん］のち，人わらはれに人の思ふばかりのふるまひありさまをきて給はば，（栄花物語，8巻61丁15）

動詞別に見ると，「往ぬ」4例，「死ぬ」2例，「かれは（果）つ」1例となる。また，用例（24）の異本「見捨てむ」の例を入れれば，「見捨つ」1例が加わる。さらに，表記上確例でないため表には入っていないが，『万葉集』に，

(34)　戀死　後何為　吾命　生日社　見幕欲為礼　（11－2592）

(35)　孤悲死牟　後者何為牟　生日之　為社妹乎　欲見為礼　（4－560）

の「戀死」「孤悲死牟」の部分は，小学館日本文学全集をはじめ，諸注で「恋ひ死なむ」とよまれることが多い。これを入れれば，「死ぬ」2例が加わることになる。従って一応の反例になる例は，最大10例ということになる。

さてここで注目すべきは，これら原則に反する例に現われる動詞のうち，多くがナ行変格活用動詞に集中するという点である。少なくとも中古末頃まで，「往ぬ」「死ぬ」のナ変動詞が助動詞「ぬ」と共起しにくいという事実はよく知られている。また，この2つの動詞には「つ」もつかない。即ちこれらの動詞は，「つ」「ぬ」のつかない形とついた形との対立がないか不完全で，「つ」「ぬ」のつかない形でも，事実上の完了形として働きえたと考えられる。従って規則性（2）の，一応の例外に見えた例のうち，「往ぬ」「死ぬ」の6例，(34)(35)を入れれば8例は，例外ではないということになる。

一方，(27)の例と(24)の異本の例は，どのように考えるべきであろうか。まず，(27)の例は，ノチ節の質が，本稿が扱っているノチ節の典型的なものと異質であると考えられる。本稿が扱っている典型的なノチ節の「のち」は，現代語で言えば，概ね「あと」という語に当たる。(27)の「のち」は，現代語で言えば，「あと」に当たるのではなく，「将来」「後のこと」のような語に当たる意味を持っている。また「のち」という語と修飾節との関係構成で言え

ば，他の典型的なノチ節における「のち」と修飾節との関係は，奥津1974における「相対名詞と付加連体修飾節」の関係にあるのに対し，(27) における「のち」と修飾節とは，同一名詞連体修飾構造を構成している（「将来（のち）にかれはてむ」から派生される）と考えられる。また，この違いは現代語訳としても現われる。通常のノチ節は「～たあと」という現代語訳を当てられるのが普通であるが，(27) のノチ節を，タ形述語を用いて現代語訳するのは困難であり，以下のような，非タ形（「るであろう」「るかもしれない」など）で訳されているのが普通である。

(36) いつかは冷却して離れるであろう将来のあることを知りもしないで，暑さで茂って夏草の深いように，心に深くあの人が思われることだ。（小学館日本古典文学全集）

(37) あの人がわたしのところから，すっかり遠のいてしまうかもしれない後のことは考えないで（岩波古典文学大系）

(24) の異本「見捨てむ」の例に対しては，(24) のノチ節の一つの読みが，(27) と同様，典型的なノチ節のものではないという説明が可能である。(24) のような文脈では

私が見捨てたあとのことをさえ，

という典型的なノチ節としての読みと，

私が見捨ててしまうであろう将来（のこと）をさえ，

という (27) のようなノチ節の読みとの二つの読みが可能である。一方が単純な誤写であるなどの可能性（注4）も捨てきれないが，本稿は当面，上の二つの読みの可能性が，二つの異文，即ち，前者の読みに対応するものとして「見捨ててむ」，後者の読みに対応するものとして「見捨てむ」，を生み出したのだと考えたい。ちなみに，『源氏物語大成』によれば，「見捨ててむ」となっているのは，松浦伯爵家舊蔵本，池田本，三条西実隆本，河内本系諸本（五本）であり，「見捨てむ」となっているのは大島本，静嘉堂文庫蔵伝冷泉為秀筆本，陽明家本，国冬本である。

以上，微妙な問題もあるが，基本的には原則（2）の②a，即ち，非状態述語の非過去形においては完了形（助動詞「つ」「ぬ」）の出現が義務的であるという点は概ね確認できたと考える。例外は，いま見たように，助動詞「つ」「ぬ」が，アスペクト上の意味と無関係につきにくい，言わば「つ」「ぬ」のついて

いない形と「つ」「ぬ」のついた形とがきちんとした対立をなしていない動詞を含むものと，非典型的なノチ節とに集中している。資料的な制約上，絶対的なことは言えないものの，例外がこのようなものに集中することは，上の原則が存在していることをうかがわせる。

3－33　非状態述語の過去形

ノチ節の非状態述語が過去形の場合（即ち，（2）の②bの場合）においては，完了形の出現は義務的でない。過去形には助動詞「き」の形と「けり」の形とがあるが，いずれの場合においても，完了の助動詞（多くは「つ」「ぬ」）は現われる場合と現われない場合とがある。以下に例を挙げる。

(38)　[かの人をむなしく見なしきこえ給うてし]のち(源氏物語，宿木，9.p49，8)
(39)　[ところのさがにやと心うく思ひ給へなりにし]のちは(源氏物語，手習，10.p198，1)
(40)　[あはれに，人知れず，見奉りし]のちは(源氏物語，東屋，9.p179，14)
(41)　[その糸の貫かれたるを遣はしてける]のちになむ，(枕草子，p224,16)
(42)　[足たたず沈みそめ侍りにける]のち(源氏物語，玉葛，4.p148，5)
(43)　[伝へきこしめしける]のち(源氏物語，鈴虫，7.p87，1)

繰り返しになるが，「き」「けり」いずれの場合にも，「つ」「ぬ」の出現が義務的でない。「つ」「ぬ」が出現していない動詞を見ても，(40)(43)の「伝へきこしめす」「見奉る」の他，「おくれ奉る」「聞く」「こもりゐる」「聞き給ふ」「見侍り」「おほせらる」「別る」「立ち返る」などがあり，特に「つ」「ぬ」が下接しにくい動詞ということはない。また，述語が過去形の場合，「のち」が「将来（のこと）」のような意味を持つことは困難なので，完了の助動詞のつかない述語のノチ節に，先述の(27)ような，非典型的なノチ節がまぎれこんでいるということも考えにくい（実際，ここでのノチ節には，述部をタ形で現代語訳する注釈が一般的である）。

3－34　原則の背景

ここまでの用例の検討を通じて，（2）の規則性が存在することが，概ね明

らかになった。ここでは，この原則がどのようなことを反映しているのかについて考えたい。

結論を大まかに言えば，この原則（2）のうち，②については，

非状態述語の非過去形は，アスペクト上は未完了が無標だが，非状態述語の過去形は，アスペクト上は完了が無標である

ということの反映であると考えたい。すなわち，非状態動詞の非過去形においては，アスペクト上は特に何の形式もないかぎりは未完了の解釈が優先し，完了性を示す場合には，完了の助動詞などが形として現われる必要がある。一方過去形においては，特に何の形式がなくても，完了の解釈が優先するので，完了性の助動詞がなくてもよい。このように考えるのが，現段階の解釈としては穏当であると考える。ただしこれは「過去形（過去の助動詞）が相対テンスとしてはたらいている」ということと同じではない。「き」「けり」全体の分布を考えれば，これらは原則として発話時基準，すなわち絶対テンスとしてはたらいており，アスペクト上の完了性，あるいは相対テンス現象に対して，上のような形で間接的に影響を与えていると見るべきである。

また原則（2）の①は，②との一貫性を考えるのであれば，

ノチ節において，状態述語（形容詞・形容動詞や状態動詞）のゼロ形は，（～ヨウニナッタのような意味での）完了の意味を持っている

という解釈をとりたい。このように考えることによって，典型的なノチ節の述部が全て完了の意味を持つということになり，また調査の範囲で，ノチ節の状態述語に完了の助動詞のついた例がないことにも積極的な説明が可能になるからである。このようなことが言えれば，助動詞「り」「たり」の用法などと同様，上代・中古語における，完了と状態との境界の曖昧さを反映している可能性があり，興味深い。ただしこの場合，状態述語のゼロ形が完了の意味を持つのが，ノチ節のみに限られるのかなど，体系全体から見て，解明しなければならない問題が残る。

4．まとめと今後の課題

以上，上代・中古語和文系資料のノチ節について，テンス・アスペクト形式の分布にいくつかの規則性のあることを示し，あわせて，その規則性が意味するものについて考えた。細かい用例の検討や，規則性の背景解釈の一部に微妙な問題があるものの，少なくとも，ノチ節のテンス・アスペクト形式の分布に，

ほぼ規則性といってよいほどの強い傾向性のあることは示し得たと考える（注5）。

当面の課題のうち，大きなものとしては，以下の3つほどが考えられる。一つは，ノチ節（やアト節）のテンス・アスペクト形式の，中世以降の実態についての調査検討である。これについては目下調査中であり，特に，完了助動詞の統合との相関関係が注目される。

もう一つは，和文系資料以外の資料における調査検討である。これについては筆者の能力および資料自体の困難さもあり，極めて不十分な調査しか行なえていない。ボーリング的に行なった調査では原則（2）を決定的に否定する例は見いだしていないが，さらに調査検討の必要がある。

本稿においては，ノチ節のテンス・アスペクトと，主節のテンス・アスペクトの相関について扱うことができなかった。この問題は，主節のゼロ形の解釈など難しい点が多いが，将来従属節のテンス・アスペクトの全貌を明らかにするためには，当然解明する必要のある点である。

また，提示した原則については一般性の高さが必要なので，用例の検討の詳細化，調査文献の範囲の拡張を行ない，多くの補強・修正の必要があると思われる。また，テキストの扱い，用例の解釈にも不備が多々あるかと思われる。今後修正していきたい。

注

（注1）竹沢1993が挙げるように，現代語のアト節でも，修飾節と「あと」の間に数量詞など他の要素が入りこむ場合は，下のようにタ形をとらないことがある。

（i）君が会う2時間後に，僕も山田さんに会う予定です。

本稿はこのような，修飾節と「あと」の間に他の要素が入りこむアト節に対応するようなノチ節は扱わない。また管見の限りでは，上代・中古資料において，そのようなタイプのノチ節の実例を発見していない。

（注2）用例の頁行数は，2－1の調査対象文献の括弧内に示した本文のものである。

（注3）テ形につく「侍り」などが主動詞か補助動詞かについては議論があるが，本稿ではその点については決定的な答えを持ち合わせていない。ただしどちらであるにせよ，この形が状態性を持つという点にはかわりがない。

（注4）なお，(27) 及び (24) の異本例のノチ節の述語が「枯れ果つ」「見捨つ」というタ行下二段動詞であることから，ナ行変格活用動詞同様，この2つの動詞に助動詞「つ」「ぬ」がつきにくいために例外をなしているのではないかということも一応は考えられる。しかし，鈴木1992などが示すように，

「果つ」「捨つ」あるいはそれを後部要素とする複合動詞には助動詞「つ」「ぬ」のつく例が存在するので，そのような説明の成り立つ可能性は低い。

（注５） 調査した資料それぞれの成立年代や書写年代の問題は常に残っている。本稿は，それらの年代にばらつきがあるにもかかわらず，一定の規則性があらわれること自体が，本稿の目的に関するかぎり調査した文献を概ねひとしなみに扱えるということの傍証になると，一応は考える。しかし現代語の場合と，言えることの確実性に差があることは，常に留意しておく必要がある。なお，年代や資料の質にさらに差があるが，今昔物語集（岩波日本古典文学大系，該当用例総数22例）や平家物語（岩波日本古典文学大系，該当用例総数18例）においても，原則（２）に対する反例は現われない。

引用文献

井島正博 1986 「時間の起点を表わすノチとヨリとの相違」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院

井島正博 1990 「従属節におけるテンスとアスペクト」『日本語文法談話会（1990.12.9.国立国語研究所）発表要旨』

奥津敬一郎 1974 『生成日本文法論』大修館書店

鈴木 泰 1992 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト ―源氏物語の分析―』ひつじ書房

竹沢幸一 1993 「日本語の時の副詞節の統語的特性に関する一考察」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究（平成４年度筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書）』筑波大学文芸・言語学系

望月満子 1987 「アトとノチの語義について ――その史的推移――」『国語学』148

（他，列挙することは不可能であるが，テキストの校異および解釈について，多数のテキスト類（影印・翻刻など），注釈書等に依っている。また，本稿をなすにあたり，大倉浩，矢沢真人，エリック・ロング，高山知明，奈部淑子他の諸先生からご助言を賜った。ご助言を生かしきっていない点についてはお詫び申し上げたい。）